

西高を去るにあたって 離任式のあいさつから

伊藤 幸雄



いよいよ西高とお別れする日が来ました。私が西高に

着任したのは昭和47年の春でした。その年は群制度の準備とかで大勢の方が赴任してみえました。たしか全日制だけで9名だったと思います。この方々も時とともに西高を去られ、私を最後に、この春で同期の桜は一人もいなくなりません。想えば長く短い19年でした。

西高の思い出は数限りなくあります。定時制の諸君も一緒に参加した耐寒マラソンや卒業式。学校群制度発足に伴う産みの苦しみの数々。大学入試改革に対応して、私も参画させていただいて改められた校内の諸制度や学校行事、例えば現在の類型別カリキュラムやメニュー方式の修学旅行等々です。

中でも私の心に最も強く残っているものは大学入試にまつわる数々の場面です。寒風について担任の先生方で激励に出かけた大協の共通一次テストとか、合格発表当日の興奮に満ちた職員室の様子などです。共通一次の日にはよく雪が降りました。しかし、西高生は寒さなどは気にしません。「燃えて栄光」の横断幕のもとで氣勢を上げたのですね。

国立大学の合格発表日には大学へ出向かれた先生方から刻々入ってくる電話に一喜一憂したものです。その日の夜は祝賀会になったり残念会になったり...

ここ数年は祝賀会ばかりで大いに盛り上がりました。校長室の隣の廊下の大学合格者の名札板も増設につぐ増設という有様です。そんな訳でも西高では感激と充実感をたっぷり味わわせていただきました。

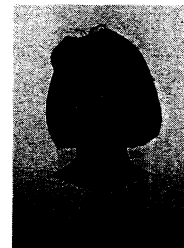
それにしても我が西高の生徒諸君は優秀です。かつて、拓植元校長は「天下の英才を得て、これを教育するは(一)のの楽しみなり」と、「孟子」の君子三樂の章を引用して我々教師や生徒の話をされたことがあります。まったくそのとおりだと思います。教師第一の楽しみを19年間も満喫させていただいて思い残すことはありません。

さて、赴任先の南陽高校で私が機会あるごとに言い続けていることが二つあります。一つは信頼関係を大切にしようというところであり、いま一つは感激に満ちた高校生活をおくれということ。言わずとも知れたことですが、これは一宮西高を強く意識して出てきたことばです。西高は生徒と先生方が信頼関係で強く結ばれた学校であると思います。生徒一人一人が学習に、部活動に、学校行事に全精力を注いでおります。そしてそれが立派な成果となって表われているからこそ、全校が感激に満ちた高校生活を送れるのだと思います。私が参ります南陽高校もこんな西高に少しはあやかりたいと思っております。

楽しい19年間を過ごさせていただき本当に有難うございました。本校の益々の発展を祈ってお別れの言葉といたします。(4月8日の離任式で右のような挨拶をいたしました。同窓会の山内先生から西高の思い出を書けとの依頼がありました)

が、卒業された皆様にごお別れの挨拶をさせていただきたくて、ここに抄録させていただいた次第です。

「大学」という新世界 鈴木めぐみ



卒業して二カ月。今までただ「学校」と呼んでいた

存在がいまや「母校」と呼ばなければならなくなりました。駅で緑色の学年章を付けた新入生をみかけたとき、私はそう感じていました。

大学という所は受験生時代に考えていたものとははるかに掛け離れた世界でした。毎日毎日満員電車で揺られて、へとへとなるまで坂道を登り続けて、そしてやっと大学に着いたと思つたらカルチャーショックの連続なのです。私の通っている大学は「平和憲章」を持ち、戦争には一切加担しないと誓っている数少ない大学のうちのひとつで、私が初めてその条文中、「……わが国の大学は、過去の侵略戦争において……戦争を肯定する学問を生み出し、……さらに、多くの学生を戦場に送り出した。こうした過去への反省から……」という部分を関西弁の先輩の声で聞いた時には、私が受験勉強をしている間に日本列島が、いや世界全体が動いていたのだと改めて気付かされ、なんて意識の低い状態で受験をし、大学生になってしまったのだらうと今までの偏った自分が情けなくなりました。

そればかりではありません。多くの教授や院生など、最先端に生きておられる方々と語り合う機会を得て、私の人生観は大いに変わりました。「世界、その中の日本」こういった目で見られるようになったのは大きな前進だと感じています。そして農場の見学の際には、農業だけでなく、生物自体を肌で感じた、そんな気がしています。

私と西高 用務員 小川 専治

東京オリンピック、新幹線開通の昭和39年分校として創立され、翌年用務員として勤務することになりました。当時は普通科四クラスと昼間定時制合わせて二百人位だったと思います。一万坪の土地に小さな二棟の建物。毎日が草取り、石拾いばかりでした。生徒達は明るくの人

びりとしていましたが、学校を創りあげるといふ開拓者精神で一杯だったと思います。用務員としての仕事も、一輪車で土運び、スコップでの地ならしと手に豆ができつらい思い出です。昭和41年に西高として独立してから、少しずつ学校らしくなってきました。校歌ができた時「くぬぎ林」という詩に驚きました。当時、くぬぎなど一本たりともありません。校長先生に相談した所、早速くぬぎ種を取り寄せて蒔いたことを今でも忘れられません。

一・二・三回生の卒業式の時、「おじさんありがとう」と礼儀正しく去っていった姿も懐かしく思い出されます。開校当初は何の設備もありませんでしたが、文化祭などのエネルギーは今も伝統として残っています。また、弥生式土器の発見も懐かしい思い出です。在職26年、今色々な思いで胸が一杯です。この3月に退職いたしました。最後に、この大なる一宮西高校の伝統の益々の発展を祈念して、26年間という長い間本当に有難うございました。

30周年記念事業への御協力のお願い

母校は平成5年度に創立30周年をむかえます。同窓会では現在、学校やPTAと提携して記念事業の計画をすすめています。詳細については次の会報でお知らせできると思いますが、その節には会員の皆様のご協力を是非ともお願いいたします。同窓会役員一同